

## マスメディア・システムにおける「基底的自己言及」の位置

大東文化大学 馬場靖雄

ニクラス・ルーマンは 18 世紀以降の近代社会を機能分化した社会として捉えており、マスメディアもまた機能分化したシステムの一つであると見なしている。マスメディアに関するこの議論は、ルーマンの「全体社会の理論 *Theorie der Gesellschaft*」構築のプロジェクトにとって、二重の意味で試金石となると思われる。

第一に、ルーマンの逝去後 IT の進展によってメディア環境が大きく変化したため、彼のこの分野に関する議論は「賞味期限切れ」になっているのではないかとの疑念が生じてくる。例えばもはや「送り手／受け手」という従来の区別は無意味になっているにもかかわらず、ルーマンのマスメディア論（『マスメディアのリアリティ』）では相変わらず、活字と電波による一方向的な回路のみが想定されているのではないか。

第二に、そのメディア環境の激変とともに／激変によって、全体社会の現状そのものも変貌を遂げつつあるとの指摘が、しばしばなされている。ネットの爆発的な普及とともに／によって、各機能領域を隔てていた分割線は、また時空的な境界線も、ほとんど溶解し、今や社会はあらゆる領域が複雑に絡み合った流動状態を呈している（「真の／偽のニュース」という区別の崩壊も、その一環である）。もはや社会の現状を機能分化（とりあえず、「専門分化」と類推的に考えてよい）という従来の特徴づけによって捉えることはできなくなった。マスメディアこそがこのような「ポスト機能分化」社会の最先端であると同時に、その推力となっている特別な「超システム」なのである云々。

本報告の目的は、改めて『マスメディアのリアリティ』を読み込むことによって、これらの疑念の妥当性を検討することにある。ただし同書「訳者解題」を含めてしばしば見られるように、後半（第 9 章以降）での、全体社会の中でのマスメディア・システムの働きや構造的カップリング、公共圏との関わりといった「マクロ」な問題を中心に取り上げるのではなく、このシステム固有のコードである「情報／非情報」とプログラムによるその特定化に焦点を当てていく。特にこのコードが非決定性（最終的には、《「情報／非情報」の区別も情報である》というパラドックスに由来する）を孕んでおり、それこそが「ポスト真実」的なマスメディアの動態をもたらしているということを明らかにする。私見では、『リアリティ』をめぐる議論においてこの「非決定性」のトピックが多くの場合無視されている（そしてその結果、「広告や定型的なドラマは何ら新たな情報をもたらさないのだから、ルーマンの議論では捉えきれない」といった批判を招来している）のは、社会システム一般の水準に関して「基底的自己言及」がしばしば「行為の事後（解釈による）成立説」として読解（報告者から見れば、誤読）され、批判されているという事態と対応するものである。『リアリティ』を読み込むという作業は、この種の極度に抽象的な議論が、より具体的な社会の現状分析と密接にリンクしているということを示してくるはずである。

さらには、報告では示唆することしかできないが、「基底的自己言及」を真剣に受け取るか否かというこの違いに即して、ルーマンとブルデューの社会理論を、パスカルを挟んで比較することも可能である。ルーマンはブルデューのようにパスカルの名を前面に掲げることはしていないが、少なくとも「プロヴァンシアル」のパスカルを継承しているのは、ルーマンのほうなのである。